

1. アートとは何か

問：「アート」と聞いて思い浮かぶものをあげてみましょう。

※書けたら近くの人と共有しましょう

アートと聞くと、絵画や彫刻、焼き物といった「物」に目が行きがちです。「物=美術」であるという考え方にとらわれて、「アートとは？」という問いに対して、絵画作品を指さすような……。

しかし、絵や工芸などはあくまでも物。アートの一側面でしかありません。

○art の言葉の意味

art はラテン語のアルス ars、ギリシア語のテクネー techné に由来し、「学問」と「技術」の二つの意味を内包していました。漢語「藝術 (げいじゅつ)」は「後漢書 孝安帝紀」に用いられ、「学問」と「技芸」をさしていました。東西微妙な差はあるものの、今私たちがイメージする精神的や創造活動的なものより、もっと具体的に探究する行為やその技にこれらの言葉を用いていました。

art は日本語では「」と訳されることが多いようです。広辞苑によれば

【】一定の材料・技術・身体などを駆使して、鑑賞的価値を創出する人間の活動およびその所産。絵画・彫刻・工芸・建築・詩・音楽・舞踏などの総称。

とあります。非常に意味の幅が広い言葉ですね。

○「art」と「アート」は異なる

前述の通り、「芸術」という言葉は、明治時代に国内に入ってきた「art」を翻訳したもの、それに対し、「芸術」の字面や芸術自体のとっつきにくさから、もっと一般の人たちにも触れやすくする狙いで使われ始めたのがカタカナ語の「アート」です。「現代アート」という言葉がありますが「現代 art」とは通常は表記しません。アートというと、とっつきやすい印象があるので、様々な人がアートとは何かについて持論を述べています。

・アートとは

現在から離れて遠い過去や見えない未来を すること

「目で鑑賞する美しいもの」ではなく、表現したいことは何なのかという

新しい、もの見方・捉え方を (暗に) すること

創造性をともなった とその



2. アートとアートではないものの境界線はどこか。

問 次に示す画像のうち、アートであるものとアートでないものに分けてみましょう

○…アートである ×…アートでない

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

【上のように選んだ理由を書きましょう】

※特に○をつけたものの共通点について考えてみましょう。

→近くの人と自分の考えを話し合ってみましょう。

様々な捉え方がありますが、

アートの基本は、

と考えれば、多くの定義に合致します。

3. アート思考とは

まず、右の空欄に完全なタンポポを描いてください。

改めて言われると結構難しいかもしれませんが、この作業は自分の視点を確認する上で良いので、頑張ってください。

【完全なタンポポ】

・表現の花：

・興味の種：

・探究の根：

○「正解を見つける力」と「答えをつくる力」

数学…

アート…

→自分なりの答えを育むことが重要。ドリルで養おう。

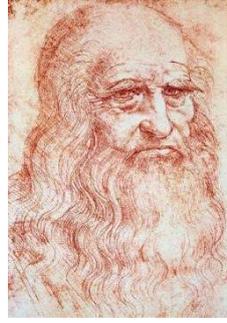
【青色の紙】

【白色の紙】

○見えないものを観る

ーレオナルド・ダ・ヴィンチに学ぶー

アートでは他者が見ていない部分に注目し、新たな着想を得るケースがしばしば見受けられます。そしてこれは科学の研究においても共通しています。その例として、分かりやすいのはレオナルド・ダ・ヴィンチでしょう。



彼は絵画・彫刻・建築学をはじめとして、力学・科学・音楽・数学・工学・文学・解剖学・地質学・天文学・植物学・執筆・歴史学・地図製作を含む幅広い分野で活躍した、ルネッサンス期のイタリア人の博学者です。『最後の晚餐』といった代表的な作品がある偉大な画家である一方で、古生物学の父や建築学の父など様々な名称で呼ばれています。

ダ・ヴィンチの『手稿 (ノートブック)』を紐解くと、彼が知覚を磨くためのありとあらゆる手立てをとっていたことがわかります。なかでも、ダ・ヴィンチが最も重視したのは、「見る／観る方法を変える」という方策でした。その見る／観る方法——それをひと言で表現するなら「
」です。たとえばダ・ヴィンチは、20体の死体を解剖しながら、精緻極まる人体解剖図を描いています (次頁の参考)。

ダ・ヴィンチが「観察=よく観ること」に高い価値を見出していたのは、何よりもまず手軽で応用性が高いからでしょう。彼は「コンスタントに観察して、書き留めて、考えることは役立つ」と語っており、実際、外出するときにはつねにベルトから紙をぶら下げ、いつでも世界を克明に観察しようと備えていたようです。

じつを言うと、観察の影響力は、視覚的刺激を超えたところにまで及びます。端的に言えば、対象を集中的に観察することによって、「
」が高まるのです。

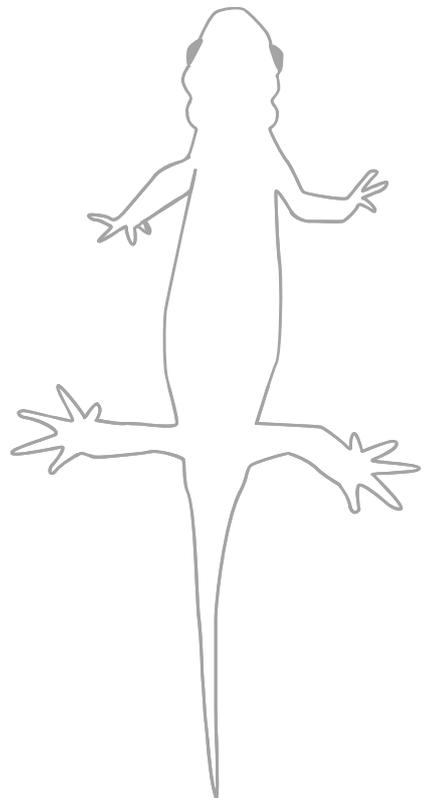
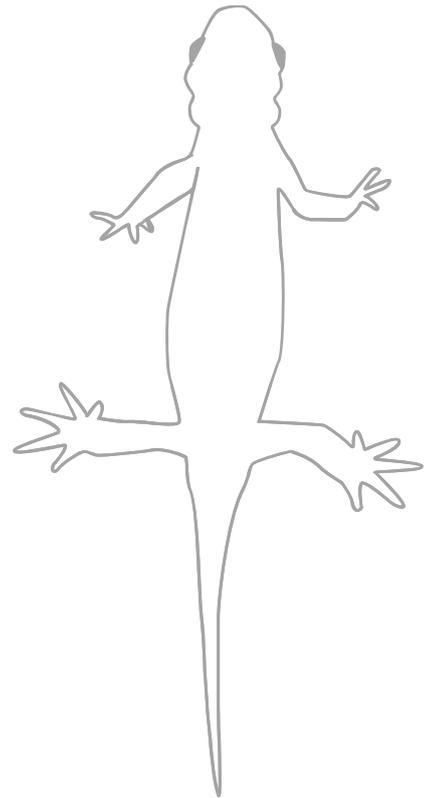
と言っても、これはオカルトのような話ではありません。例えば、「眼では見えないものを
で観る」と表現すれば、分かりやすくなるでしょうか。この脳で観る機能は「マインドアイ」、そこで観られる像は「メンタルイメージ」と呼ばれたりもします。

メンタルイメージは、何気ないときにひらめきや直観としていきなり観えることもありますし、何かの問題を積極的に解決しようと深く思考しているときに、新しい発見として観えることもあります。

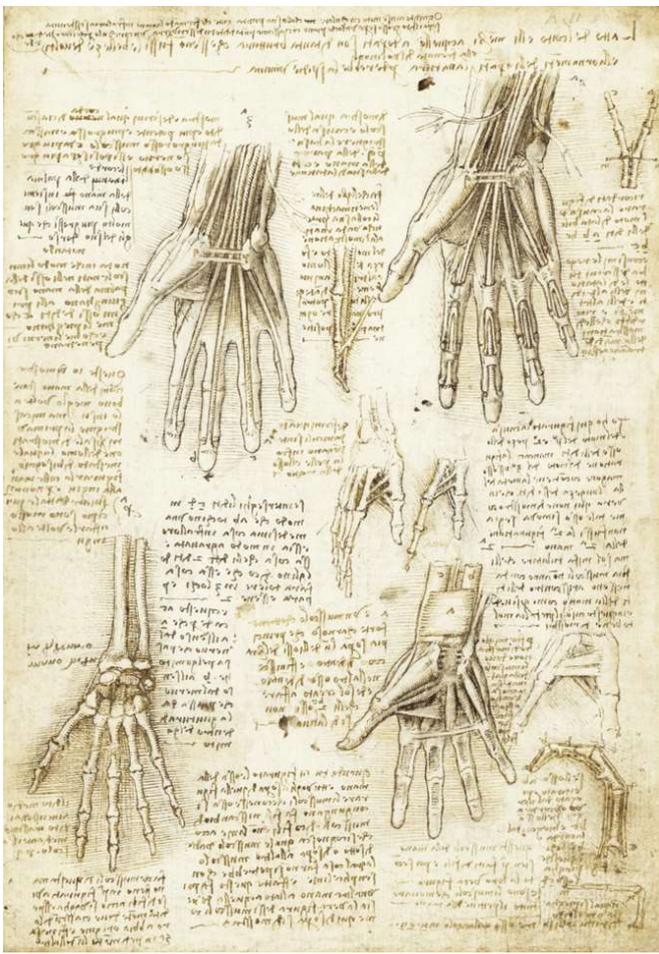
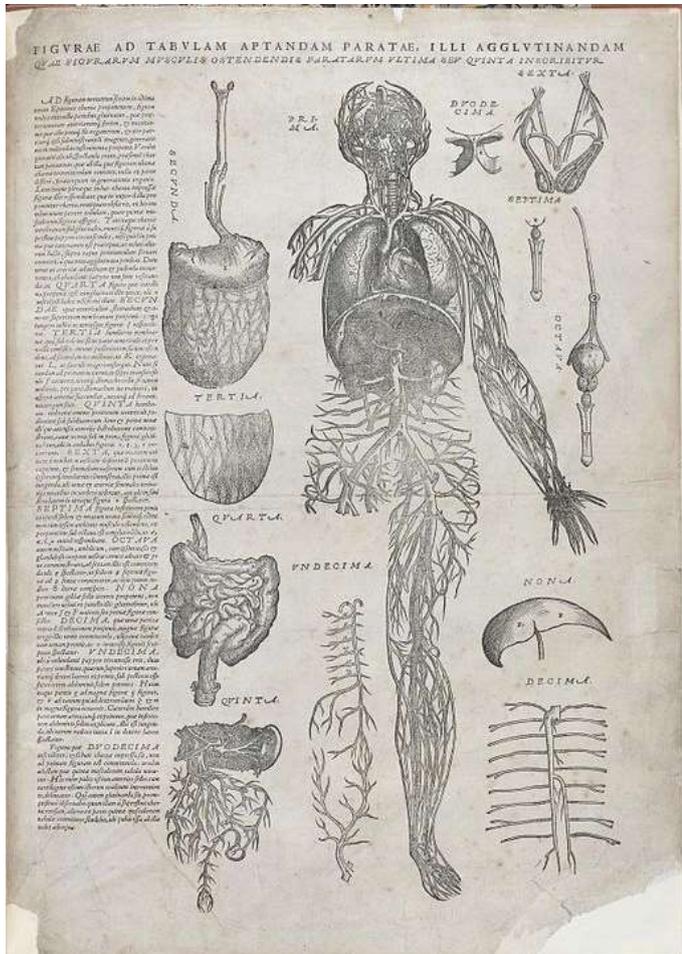
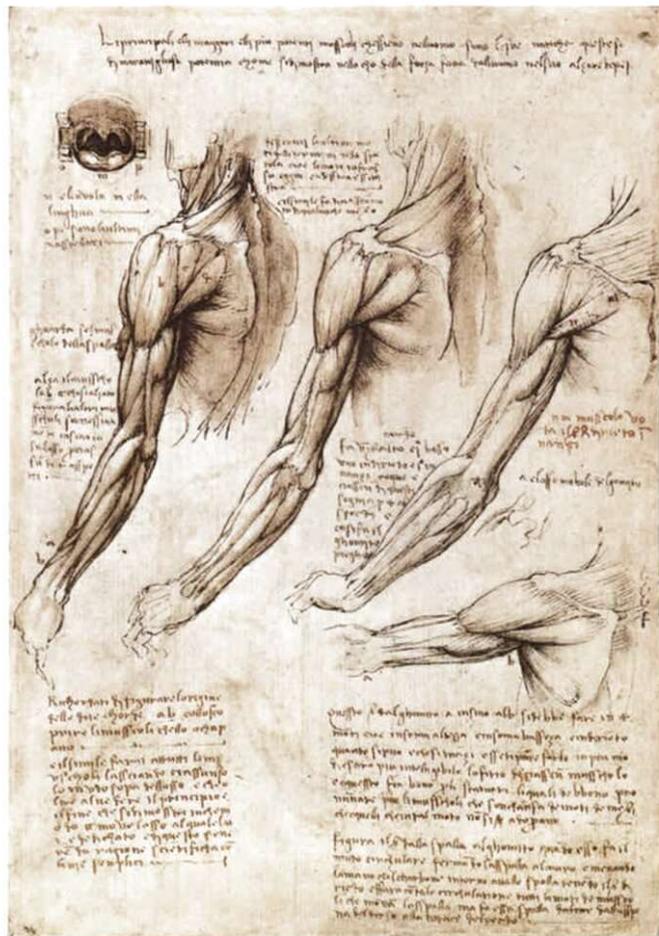
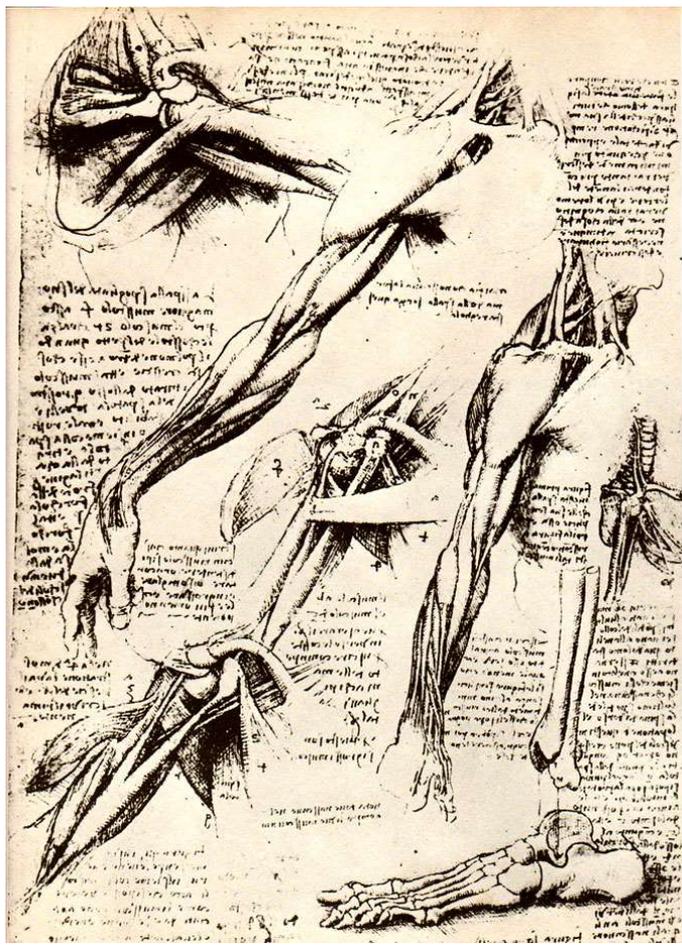
一般的に、彼の知的生産は「アート × サイエンス」のクロスオーバーによって生まれたとされており、ダ・ヴィンチは「リベラルアーツ的な知識人」の代表格のように言われることもあります。

しかし、そうした「知の融合」はダ・ヴィンチのすごさの一部ではありません。むしろ、そのバックボーンには、日常のなかでの質の高い「観察」があるのです。視覚がとらえたありのままの事実を「よく観る」ことにこだわり抜いたからこそ、彼の「アイディアを観る眼」はひたすら磨かれ、圧倒的な名画や先見性に満ちた創造へとつながっていったのでしょう。

【よく観察してスケッチしよう】



(参考) レオナルド・ダ・ヴィンチの「解剖手稿A」 人体の秘密にメスを入れた天才のデッサン グラフィック社 (2018)より



1. アートとは何か

問：「アート」と聞いて思い浮かぶものをあげてみましょう。

※書けたら近くの人と共有しましょう

アートと聞くと、絵画や彫刻、焼き物といった「物」に目が行きがちです。「物=美術」であるという考え方にとらわれて、「アートとは？」という問いに対して、絵画作品を指さすような……。

しかし、絵や工芸などはあくまでも物。アートの一側面でしかありません。

○art の言葉の意味

art はラテン語のアルス ars、ギリシア語のテクネー technē に由来し、「学問」と「技術」の二つの意味を内包していました。漢語「藝術 (げいじゅつ)」は「後漢書 孝安帝紀」に用いられ、「学問」と「技芸」をさしていました。東西微妙な差はあるものの、今私たちがイメージする精神的や創造活動的なものより、もっと具体的に探究する行為やその技にこれらの言葉を用いていました。

art は日本語では「**芸術**」と訳されることが多いようです。広辞苑によれば

【 **芸術** 】一定の材料・技術・身体などを駆使して、鑑賞的価値を創出する人間の活動およびその所産。絵画・彫刻・工芸・建築・詩・音楽・舞踏などの総称。

とあります。非常に意味の幅が広い言葉ですね。

○「art」と「アート」は異なる

前述の通り、「芸術」という言葉は、明治時代に国内に入ってきた「art」を翻訳したもの、それに対し、「芸術」の字面や芸術自体のとっつきにくさから、もっと一般の人たちにも触れやすくする狙いで使われ始めたのがカタカナ語の「アート」です。「現代アート」という言葉がありますが「現代 art」とは通常は表記しません。アートというと、とっつきやすい印象があるので、様々な人がアートとは何かについて持論を述べています。

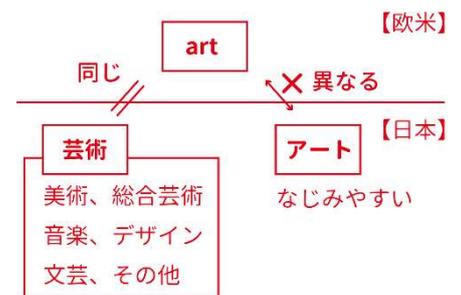
・アートとは

現在から離れて遠い過去や見えない未来を **想像** すること

「目で鑑賞する美しいもの」ではなく、表現したいことは何なのかという **考え方そのもの**

新しい、もの見方・捉え方を (暗に) **提議** すること

創造性をともなった **技術** とその **応用**



2. アートとアートではないものの境界線はどこか。

問 次に示す画像のうち、アートであるものとアートでないものに分けてみましょう

○…アートである ×…アートでない

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

【上のように選んだ理由を書きましょう】

※特に○をつけたものの共通点について考えてみましょう。

→近くの人と自分の考えを話し合ってみましょう。

様々な捉え方がありますが、

アートの基本は、人間が創り出すもの（有形無形問わず）すべて

と考えれば、多くの定義に合致します。

VUCA：先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態

V (Volatility：変動性)
U (Uncertainty：不確実性)
C (Complexity：複雑性)
A (Ambiguity：曖昧性)

※このような時代だからこそ、アート思考は重宝する。

3. アート思考とは

まず、右の空欄に完全なタンポポを描いてください。

改めて言われると結構難しいかもしれませんが、しかし、この作業は自分の視点を確認する上で良いので、頑張って描いてください。

【完全なタンポポ】

- ・表現の花：アートの「作品」にあたる。多様であるが生き生きとしている。
- ・興味の種：「興味」や「好奇心」、「疑問」がつまっている。アート活動の源となる。
- ・探究の根：アート作品が生まれるまでの長い探究の過程。

※空間的にも時間的にもこの植物の大部分を占めるのは目に見える「表現の花」ではなく、地表に顔を出さない「探究の根」の部分。

○「正解を見つける力」と「答えをつくる力」

数学… 一つの答えが存在 (=太陽)

アート… 状況により答えが変わる (=雲)



【青色の紙】

【白色の紙】

→自分なりの答えを育むことが重要。ドリルで養おう。

〇見えないものを観る

ーレオナルド・ダ・ヴィンチに学ぶー

アートでは他者が見ていない部分に注目し、新たな着想を得るケースがしばしば見受けられます。そしてこれは科学の研究においても共通しています。その例として、分かりやすいのはレオナルド・ダ・ヴィンチでしょう。



彼は絵画・彫刻・建築学をはじめとして、力学・科学・音楽・数学・工学・文学・解剖学・地質学・天文学・植物学・執筆・歴史学・地図製作を含む幅広い分野で活躍した、ルネッサンス期のイタリア人の博学者です。『最後の晚餐』といった代表的な作品がある偉大な画家である一方で、古生物学の父や建築学の父など様々な名称で呼ばれています。

ダ・ヴィンチの『手稿 (ノートブック)』を紐解くと、彼が知覚を磨くためのありとあらゆる手立てをとっていたことがわかります。なかでも、ダ・ヴィンチが最も重視したのは、「見る／観る方法を変える」という方策でした。その見る／観る方法——それをひと言で表現するなら「**観察**」です。たとえばダ・ヴィンチは、20体の死体を解剖しながら、精緻極まる人体解剖図を描いています (次頁の参考)。

ダ・ヴィンチが「観察=よく観ること」に高い価値を見出していたのは、何よりもまず手軽で応用性が高いからでしょう。彼は「コンスタントに観察して、書き留めて、考えることは役立つ」と語っており、実際、外出するときにはつねにベルトから紙をぶら下げ、いつでも世界を克明に観察しようと備えていたようです。

じつを言うと、観察の影響力は、視覚的刺激を超えたところにまで及びます。端的に言えば、対象を集中的に観察することによって、「**見えないものを観る力**」が高まるのです。

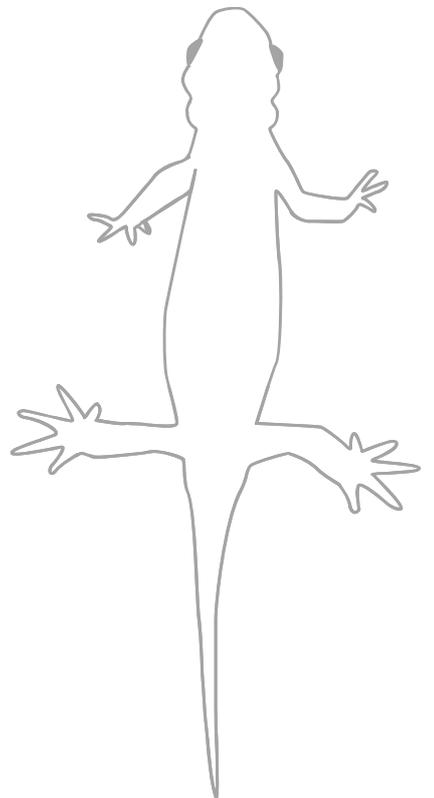
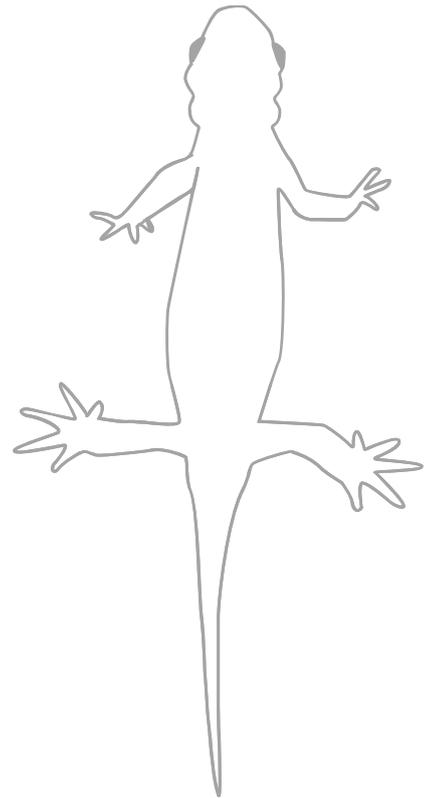
と言っても、これはオカルトのような話ではありません。例えば、「眼では見えないものを **脳** で観る」と表現すれば、分かりやすくなるでしょうか。この脳で観る機能は「マインドアイ」、そこで観られる像は「メンタルイメージ」と呼ばれたりもします。

メンタルイメージは、何気ないときにひらめきや直観としていきなり観えることもありますし、何かの問題を積極的に解決しようと深く思考しているときに、新しい発見として観えることもあります。

一般的に、彼の知的生産は「アート × サイエンス」のクロスオーバーによって生まれたとされており、ダ・ヴィンチは「リベラルアーツ的な知識人」の代表格のように言われることもあります。

しかし、そうした「知の融合」はダ・ヴィンチのすごさの一部ではありません。むしろ、そのバックボーンには、日常のなかでの質の高い「観察」があるのです。視覚がとらえたありのままの事実を「よく観る」ことにこだわり抜いたからこそ、彼の「アイデアを観る眼」はひたすら磨かれ、圧倒的な名画や先見性に満ちた創造へとつながっていったのでしょう。

【よく観察してスケッチしよう】



(参考) レオナルド・ダ・ヴィンチの「解剖手稿A」 人体の秘密にメスを入れた天才のデッサン グラフィック社 (2018)より

